

平成 26 年度第 1 回門真市めざせ世界へはばたけ事業推進委員会議事要旨

日 時 平成 26 年 5 月 30 日 (木) 午後 3 時 00 分～4 時 30 分

会 場 門真市役所本館 2 階 大会議室

出席者 松宮委員・西村委員・柴田委員・藤井委員・上甲委員・牧菌委員

事務局 上田課長補佐・大川副参事・清水主任

<事務局> それでは、平成 26 年度第 1 回門真市めざせ世界へはばたけ事業推進委員会を開催いたします。

まず初めに、人事異動により委員の一部に変更がございましたので、事務局より改めまして委員の皆様方をご紹介させていただきます。お手元の資料 1 をご覧ください。

関西外国語大学英语キャリア学部、松宮新吾教授でございます。

関西外国語大学英语国際学部、西村孝彦教授でございます。

教育委員会事務局生涯学習部長、柴田昌彦でございます。

教育委員会事務局学校教育部長、藤井良一でございます。

教育委員会事務局学校教育課長、上甲尚でございます。

教育委員会事務局生涯学習課長、牧菌友広でございます。

本日、委員をお願いしております関西外国語大学外国語学部並松善秋教授はご欠席されておりますので、ご報告いたします。

続きまして、事務局の紹介をさせていただきます。

生涯学習課課長補佐、上田でございます。

学校教育課副参事、大川でございます。

最後に私、生涯学習課主任、清水でございます。よろしく願いいたします。

議事に先立ちまして、柴田委員長からご挨拶をお願いいたします。

<柴田委員長> みなさんには、お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。とりわけ関西外国語大学、松宮教授、西村教授には暑い中参加していただきありがとうございます。もうお世話になりまして早くも約 4 年目と、もう 3 年たったわけですが、1 回目から申しあげていますように、1 回 1 回発表する生徒もそうでしょうけれど、我々も同じように学習して進化しながらこの事業を継続して参りたいと思いますので、皆様のご協力、ご支援賜りますようよろしくお願いいたしまして、簡単ですけど挨拶とさせていただきます。

<事務局> ありがとうございます。案件に入る前にお手元の資料の確認をお願いします。

まず、第 1 回推進委員会議事次第です。

資料 1、門真市めざせ世界へはばたけ事業推進委員会名簿です。

資料 2、門真市附属機関に関する条例の施行に関する門真市教育委員会規則です。

資料 3、門真市中学生海外派遣研修行程表です。

資料 4、第 4 回門真市中学生英語プレゼンテーションコンテスト実施要項 (案) です。

資料 5、第 4 回門真市中学生英語プレゼンテーションコンテスト応募用紙 (案) です。

資料 6、第 4 回門真市中学生英語プレゼンテーションコンテスト一次審査実施要領 (案) です。

資料 7、第 4 回門真市中学生英語プレゼンテーションコンテスト二次審査実施要領 (案) です。

資料 8、第 4 回門真市中学生英語プレゼンテーションコンテスト審査実施要領 (案) です。

資料 9、事業の課題と対策 (案) です。

最後に、第 3 回門真市中学生英語プレゼンテーションコンテストパンフレットです。

お手元がないものがございましたら、ご連絡いただきますようお願いいたします。

ないようでしたら、これからの進行を柴田委員長にお願いします。

<柴田委員長> それでは、議事次第に沿って進めてまいりたいと思います。

2 番の案件 1、第 3 回目の中学生海外派遣研修について、事務局のほうからこの件の説明よろしくをお願いします。

<事務局> それでは、ご説明申し上げます。資料 3 をご覧ください。第 3 回門真市中学生海外派遣研修は、平成 26 年 8 月 2 日 (土) から 11 日 (月) までの 10 日間、第 3 回門真市中学生英語プレゼンテーションコンテストにおいて、最優秀賞と優秀賞を受賞した 9 名と引率職員 2 名、そして添乗員 1 名が同行して、オーストラリア、アデレード市へ行く予定となっております。研修先は、昨年度と同様のチャールズ・キャンベル・カレッジです。海外派遣研修に先立ち、事前研修を 3 回行います。事前研修では、市内英語教員と関西外国語大学の学生の参加の協力を得て、研

修生が持ってきた家族や学校、大切にしている物の写真を、英語で説明する練習やホームステイでの英会話の練習を行います。3回目は松宮教授のご協力を得て、現地校とスカイプ交流を行う予定にしております。

現地オーストラリアでは、1ホストファミリーに1名の研修生がステイする形を取り、学校では、パディと呼ばれる学生についてもらい、一緒に授業を受けます。

課外学習では、クリーランド野生保護区やタンザニア・アボリジニ文化研究所を見学します。また、ウェルカムセレモニーでは、研修生によるプレゼンテーションを行います。

<柴田委員長> ありがとうございます。何かこの件につきましてご質問とかございませんでしょうか。去年と変わっているところはありますか。

<事務局> 行程関係では変わっておりません。ただスタッフの取り扱う内容で去年は、ホームページ等に掲載するために写真等を送っていただいております。実際向こうの学校のインターネット回線や、ホームステイ後のインターネット回線を利用しておりましたが、今回はWIFIを調達することでどこからでも画像を送れるような形をとれるようにしました。

<柴田委員長> 他に何かご質問等ございませんでしょうか。ないようでしたら次の案件に移らせていただきたいと思います。

それでは次の案件ですけれども、今年度の第4回プレゼンテーションコンテストについて、ご説明よろしく願いいたします。

<事務局> それでは、ご説明申し上げます。

本推進委員会では、今回4回目を迎えるに当たり、改めて応募・審査方法、実施内容についてこれまでの3回を振り返りながら、ご検討いただきたいと思いますと考えております。

検討いただきたい内容が4つほどございますので、それぞれについてご検討していただいたのちに、次の案件に移らせていただきたいと思いますと考えております。

まず、応募テーマです。資料4をご覧ください。資料につきましては、昨年、一昨年と応募テーマを①「私にとって大切なもの」②「気になる社会の出来事」としておりましたが、資料9の昨年度推進委員会でいただいた事業の課題の中にもありますように、応募内容の均一化を避ける形を取り入れ、かつ「プレゼンテーションコンテスト」であることに重点を置いて、メインテーマを「あなたがみんなに訴えたいこと」とし、その例としてこれまでの「大切なもの」や「気になる社会の出来事」、そして本事業の趣旨である「門真から地域にそして世界にはばたく人材づくりをめざす」ことを踏まえ、「門真について」などを設けて表示したいと考えております。テーマについては、本委員会で決定をお願いします。

<柴田委員長> 今説明がありましたが、「あなたがみんなに訴えたいこと」は、どこにありますか。

<事務局> 書いてなくて申し訳ありません。

<柴田委員長> 書いてなかったらどうやってわかるのでしょうか。

<事務局> まだ検討事項であるということで、今はこの関係資料を昨年のもので使わせていただきました。

<柴田委員長> 案はついてないけれども、これは去年の資料で、2枚目の9番の1番「あなたがみんなに訴えたいこと」として、その例示として1番と2番があるということですか。最後「門真について」を何か設けるとおっしゃっていましたがそのところもう一度すいませんわかりやすいようにお願いします。

<事務局> これは本事業の主旨であります、門真からそして地域から世界にはばたく人材をつくっていくということを目指すことがうたわれておりますので、それを考えますと、まず門真のことを考えてほしいという事務局内の思いでもありますので、そのあたりもふまえて応募者の中から門真のことを調べて訴えかけてほしい、そのような人材がでてきてもらいたいという願いをこめてテーマのひとつにしたいと考えております。

<柴田委員長> テーマ①、②去年のものがありませんね。それは取り除いて家族などの例示した中に「門真について」を入れるわけですか。

<松宮副委員長> よろしいですか。テーマとしてその方が自由度を高まるということと、これまで1番、2番としていたものを例のレベルに一段切り下げるというのについては、いいと思います。テーマというのをなるべく短く、今案としては出ていませんけれども、「今、伝えたいこと」などという中学生の頭の中ですっと入ってくる短いキャッチーなフレーズにして、その例として、1番、2番、その中に3番目として門真のすばらしさというような形になるんでしょうね。その

あたり具体的に示しているが一番わかりやすいと思いますが、その方が本来の事業の主旨に合うというふうに考えます。

<柴田委員長> 他に何かご意見、西村先生どうぞ。

<西村委員> 具体例を何個かあげていくとわかりやすい。松宮さんがおっしゃられたように、身近な具体例を何個かあげておくといいと思います。

<柴田委員長> あくまで例として。

<西村委員> 例として。

<柴田委員長> 去年まで一番多かったのは、種類分けはしてないのですか。

<事務局> しておりません。でも多かったのは2つに分かれている中では、家族のことは1回目から通して出てきました。あとはペットのことですね。家族間で大切にしているもの。どうしても気になる社会の出来事につきましては、自分たちが小学校で学んできたことがベースになるので、環境問題であったり、戦争のことであったりということが題としてでてきたことが多かったと感じています。

<柴田委員長> テーマの件は、だいたい今の形でよろしいですか。

<事務局> つぎに審査方法について、ご説明します。資料6をご覧ください。昨年度推進委員会においてご意見いただきました「門真らしさを盛り込む」部分をもう少し明確にして、審査内容に反映したいと考えております。日本語部分で「テーマ」を強くアピールし、訴えているようなものについて一次審査で表現できているかを十分判断していただく部分に配点を大きくする案を提案させていただいております。具体的には、2番の3番の部分で概要の日本語訳、及び理由に対する審査という、一次審査要領案の2番の3番ですけれども、ここの日本語訳を5点満点、理由点を10点満点の合計15点。これは昨年までは日本語訳5点、理由点5点として合計10点。英語点数は上位12点なので今までですと22点満点だったものを、今回は27点満点で評価したいと考えています。

<柴田委員長> 今の27点の所わかりにくかったのもう一度お願いします。資料6ですね。

<事務局> 資料6の2の(3)です。概要の日本語訳及び、理由に対する審査の所を以下読み上げますと、概要の日本語訳及び理由を以下の基準に用いて、日本語訳5点満点、理由点10点満点の合計15点満点で採点する、を提案させていただいております。これが昨年までは理由点が5点でした。この理由点5点というのは、資料5の最後の200字以上300字未満で書く方眼のスペースの所に、応募者が理由を書くわけですが、ここで訴えたいものを強くアピールする、説得力があるもの、という何かキラッと光るものがあるものについての配点を大きく取り入れたいということでプラス5点、全体の5点のところ、5点配点を大きくして、全体をこれまで22点だったのを27点として一次審査の採点をしたいと考えているところです。

また、一次審査通過者に対してのフォローとして、二次審査事前研修を実施したいと考えております。審査方法については以上です。ご検討のほどよろしくお願いいたします。

<柴田委員長> 今質問があったわけですが、いかがでしょうか。先ほどおっしゃっていた、みんなに伝えたい、訴えたいということと、プレゼンテーションであるということをもう一度見直して、その点を強調したい、取り上げたいということですか。

<事務局> はい。

<松宮副委員長> 今の基準は、原点回帰ということになるかと思います。少し応募用紙のこの資料をご覧ください。中学生プレゼンテーションコンテスト応募用紙と書いてあって概要の日本語訳を記入してください、となっていますがその訳となっていて、英語が主となり、日本語が従になってしまうので、訳を取っ払ってしまって、概要を日本語で記入してくださいということで英語と日本語と同じように、要は理由というのが思い、心、ハートになるわけですから、プレゼンテーションコンテストの一番の狙いはまず熱い思いがあるかどうか。あと、英語に関しては関西外大の学生がお世話になっておりますけれども、事前研修等でそれだけの力をつけさせることができるかと思いますので、そういう意味では小中学校の先生方、学校教育のしっかりとした指導に助けられるということですので、この「日本語の」というよりも、思いの部分により協調させていくということであれば、これは主旨に合致するかなというふうに思います。そのためには、この応募用紙のもう1か所ありますよね。この左側の枠の所の概要の日本語訳というなるべく英語と日本語の主従の関係が高いので、同じウエイトを置く、ということで訳も取ってしまったほうがいいかもしれませんね。

<柴田委員長> 得点も事務局がこのように申しておりますけど、よろしいでしょうか。

<事務局> コンテスト来場者の増員及び、来場者への配慮についてご説明します。コンテスト来場者の中に発表者の年齢に近い小学校5年生から中学校2年生の子どもたちが少ないとご意見いただいておりますので、その対策としまして、これまで中学校にのみ配付していました来場チラシを小学校へも配付し、来場ポスターを各小学校5・6年生のクラスに1枚、中学校の全クラスに貼れる枚数を配布することを予定しております。来場者への配慮につきましては、第3回プレゼンテーションコンテストパンフレットをご覧ください。発表内容がすべて英語であることから会場で配布するパンフレットの個人紹介欄を少し大きくして、発表内容の重要な単語を載せ、日本語訳もつけておくような工夫を施そうと考えております。

このあたりについて委員の皆様のご意見を頂けましたらありがたいと思います。

<柴田委員長> ということは、ページ数が増えるということですよ。2倍になりますか。

<事務局> 検討しているのは、これにもう1枚増やして8ページだけになるかなとかん。

<柴田委員長> 観客の方への配慮ということと、それから中学生になっていない子に対する配慮ということですね。いかがでしょうか。英語の部分はどのような内容をここに、ここにもだいたい思いが書いていますけど、この思いプラスどのようなことですか。

<事務局> 模造紙に例のセンテンスを子どもたちが書いています。ところが、会場の方はその意味がわからない方もおられることもあって、プロジェクターに表示されても、少し戸惑うと会場に来られた方からお伺いすることができましたので、その意味がわかればいかなと考えております。

<西村委員> 広報を広めていく中で小学生も大事ですけど、このコンテストがもっとすばらしいものになってきて、私の教える大学生も見に来ていました。前回、会場に来られた中学生が少し少ないと思いました。幕が上がったときに、あの会場ができるだけいっぱいになるような、中学生がどれだけたくさん自分の友達が発表している姿を見られるように、各学校から何人と決めるとするのは、難しいでしょうけど、もっと各学校から中学生が来ていただく状況を作られたら、もっとこのコンテストの当日がものすごくすばらしいものになるように思います。本校の大学生もほんとに感激して、「中学生がここまでやっているのか」と「すごい」と言っていましたし、中学生がもっとたくさん来るようにすれば、本当に申し分ないコンテストになると思います。

<柴田委員長> ありがとうございます。事務局は、今のご意見を参考にして中学生も増えるような検討をお願いします。

<事務局> 続きまして、コンテストの発表者への質問、審査、発表方法についてご説明します。資料9をご覧ください。事業の課題と対策（案）5番、6番部分です。

前回のコンテスト時に質問者を発表者ごとに交代していたことに質問内容に差異が出ているのではないかとご意見をいただいたことや、プレゼンテーションコンテストという意味合いからもこの質疑応答を充実させる必要があると考えることからこれまで2問程度の質問としておりましたが、4問程度、つまり質問者2名が2問ずつ質問する案でご提案させていただきます。

発表方法については、奨励賞受賞者への配慮から受賞発表前に「学校順」や「あいうえお順」にする旨を司会側から会場に伝えて、全体の順位が予想できない配慮を取りたいと考えております。また、事前研修時と発表前に本選に残ることのむずかしさ、すばらしさを発表者や会場の方に伝えていきたいと考えております。

また、これまで最優秀賞、優秀賞受賞者へ今後の連絡をコンテスト終了後楽屋にて口頭でお伝えしておりましたが、これも後日事務局からご連絡させていただく方法などを考えております。以上で説明を終わります。

<柴田委員長> 当日は、発表を境に雰囲気ガラッと変わってしまうのはいたしかたないですけども、勝者、敗者の世界になりますのでそれを和らげるということで、あまり刺激的にならないように、みんながここに来てだけでもすばらしいことだとおっしゃりたいと思いますが、その分の配慮と質問をどうするということですか。

<事務局> これまで質問は、2問程度ということで質問していただいたのですが、これもプレゼンテーションコンテストということのを重要視すると、会場の質問と発表者のやり取りがとても大切だと感じていることから、質疑応答の部分を2問から4問に増やして十分に会場とのやり取りをしていただきたい、見てもらいたい、訴えていただきたいという部分を増やしている部分です。時間につきましてもこれまで2問程度の質問をこれまで3回実施しましたが、発表時間は間短くまとまっていたという実績がありましたので、この判断で提案させていただきました。

<柴田委員長> これは質問をしている先生にちょっとお聞きしたいところですけども。

<松宮副委員長> そうですね。これはまず質問のやり方になりますけど、質問者である我々も練習しなければならないのがありますね。中学生に対して2つの質問をする。要するに1つはショートクエッションズと言って、本当に簡単に答えが出せるもの。そして1つは子どもが一番言いたいことに関することをプレゼンテーションの言葉ではなく、直接会場の方に語りかけることができるように配慮で質問の主旨と方法を、質問者側も我々も少し検討すれば十分可能であろうと思います。

これを今年度から新たに入れていく意味において、リハーサルが今後やはり重要になってきます。これは何かを仕込む意味ではなくて、リハーサルの段階でボランティアの大学生や中学校の先生が指導する過程を通じて、常に子どもに問いかけていくようなコーチをしておく、この問いかけられた子に対して応答する習慣的なものができますので、やはりそういったことも含めて今回選抜される、今回4回目になりますけど二次審査を通過した子どもたちに対してはそれをあらかじめ事前に研修の中に、リハーサルの中に入れていくことができれば、これらは十分に対応が可能であろうと思います。

<西村委員> 質問をリハーサルの、どんどん行ってトレーニングするのは良いと思います。私がふと思うのが4問に固定すると、中学生側からすごく頑張って答える子と全く答えられない子の差が、ピタッと出るように思います。この質疑応答はプレゼンだけじゃなくて、インタラクティブできるところがやっぱり重視しているので、その審査の割合は全体の中の一部であって、そこをクローズアップしていくとそこで答えられなかった子と、4問パッと答えた子とのそこではっきりしすぎるような気がします。その辺をちょっと配慮しながらリハーサルでいろいろ質問をしていけば、可能だと思います。4問固定するのはちょっと私も疑問です。

<松宮副委員長> 一番いい方法はいわゆる、平等性、均等性という考え方であって、一番すべきコンテスタントを子どもに与える時間です。たとえば4分間、5分間にしましょうか。5分間与えます。3分間は全員プレゼンしなさい、2分間質問の時間がありますよ。その2分間をそのフロアの二人の先生と、一人でやってもいいですけど、子どもたちがどういうやりとりをするのか、というふうにしてやってそこで4問であればトントンと行って、5問であれば5問の形でもいいと思いますね。1問だけで終わってしまってもいいと思います。それは重大なことであって、彼の言えなかった、彼女が言えなかったことをその2分間でとうとうと述べる可能性もありますし。ですから、質問の数よりもその平等性という意味ではなく、例えば司会の方から全体の会場に対してまたは、パンフレットにこのプレゼンテーションコンテストの流れという形で。不利益とか有利、不利にはやっぱり非常に敏感なんですね。とくに保護者の方とか。あの先生がこういう質問したからフリーズしてしまって舞台上で言えなくなってしまったっていう発想でセンティブになりますからすべての子どもに5分間時間を与えています。3分間はプレゼンです。2分間はQ&Aです。この中で様々な質問されます、というような案内であればやりやすいのかなと思います。3、4問程度というような表現をされるのならいいのではないのでしょうか。ですから、質問者がプレゼンテーションの内容に応じて質問者が瞬間的に質問を準備してやりとりしますので、単問の応答でやりとりができるショートクエッションをひとつ、そしてプラス内容に関わることひとつという質問者の方も答えを引き出すアプローチをとりますから、そのあたりで少し検討させていただいて、そしてその内容をリハーサルにも埋め込んでいくと、学生に4問あるよという指導の必要はありませんので、そのあたりが審査をする上での平等性ということにつながるかなというふうに思います。

<柴田委員長> 平等性、この事業の主旨は「事業とは」に書いていますが、コンテストのことですよね。主にこのパンフレットは、コンテスト関係者を対象にしていますから、当日来場者にしぼって、今先生がおっしゃっていたようにどういうことを主旨にしてコンテストをやっているとか、平等性を保つためにどのように、例えば何分以内にこれとこれを審査していますと書くのも一つの手だと思います。

<事務局> そのあたりは、コンテストが来年の2月と時間ありますので、このあとご提案させていただきますけども、2回目の推進委員会をコンテスト前に実施したいと考えておましてそのあたりまでに検討させていただき、案をメール等で配信させていただいて、事前にご確認できるように形づけていきたいと思っています。もしくは、事前研修までにこの形はまとめないといけないと思っていますので、ご連絡できるような形にしたいと考えております。

<松宮副委員長> たぶん前回の委員会でも申し上げさせていただきましたが、質問についてですね。仮に2人の質問者が出た場合は2人が1問ずつ質問する形であれば前回より改善され、見

る方、ご存じでない方が同じような質問をしてくれているのだな、その人の発言の癖とかいろいろなことがありますから、納得されるかなと思いますので、問題数、人の数を増やすよりも、質問者が2人いれば2人とも質問すると、3人いれば3人とも質問をするところで、時間も平等になりますし、2人の質問者がそれぞれ1問ずつくらいの方が、質問者の方も分かりやすいでしょうし、2問質問してくださいと言われてもなかなか難しいので、また検討を加えていただければよいと思います。

<藤井委員> このコンテストはプレゼンテーションという発表の場と、コミュニケーションという場面に分かれていてその後半部分を充実させていくということでは、これまでやってきたことをさらに発展されることだと思います。事前研修の場には学校の教諭も来ておりまして、そういう観点がこれから少し強化されますよということを今年度はメッセージとして出していただいでほしいです。質疑応答については、日本語でもいいという話ですけど、基本的に英語じゃないといけないみたいになっているところもあるので、あなたがそのメッセージをどう伝えようと思っているのかという心とか、気持ちとか、もちろん英語の技術とか、総合的に評価されるということを、併せてですが学校にもきちんと伝えて、事前に関西外大の学生さんと協力する研修の分と、あるいは学校の中でそういう観点を研修を行って、「しっかり言わないといけないよと、ダメな場合も何回も繰り返し言うてくれるからしっかり聞いて、日本語でもいいからしっかりいっぱい練習するんだよ」ってところを先生方に伝えていただければと思います。

<柴田委員長> 案件2はこれだけです。それでは案件3に移らせていただきます。今後のスケジュールについて説明をお願いします。

<事務局> それでは、ご説明いたします。海外派遣研修につきましては、6月から事前研修を3回行います。7月25日金曜日には、午前市長、正・副議長、教育長への表敬訪問を行い、午後から3回目となります事前研修を行います。海外派遣研修は、8月2日から11日までの期間で実施し、帰国後は報告の場を設け、同窓会も予定しております。

第4回プレゼンテーションコンテストは、7月の広報におきまして応募を開始し、市内各中学校1・2年生に応募用紙を配付いたします。また、近隣私立中学校にも門真市在住生に対して応募を呼びかけていきます。9月26日に出場者の募集を終了し、10月上旬に書類審査、二次審査事前研修の後に、11月29日に面接審査を実施する予定です。また、12月には第4回海外派遣研修のために門真市中学生海外派遣業務の委託事業者募集を開始し、翌年2月に委託事業者を決定する予定です。

第2回門真市めざせ世界へはばたけ事業推進委員会の開催は、平成27年2月上旬から中旬を考えております。ここでは、海外派遣研修などの実施報告とプレゼンテーションコンテストの進捗状況について報告し、コンテスト最終審査当日の確認をお願いする予定をしております。日程につきましては、改めてメールにて調整をさせていただく予定にしております。

以上で、説明を終わります。

<柴田委員長> 8月2日から11日まで海外派遣研修、帰ってきましたら去年、その前の年の研修生との同窓会があり、そこから少しあきますけども、10月から書類審査、2次審査が11月末、12月に委託事業者を募集、2月に海外派遣委託事業者が決まり、同時に本番を迎えるということで、その時に第2回目の推進委員会があります。

他に確認事項はございますか。

<藤井委員> 表敬訪問のときのご挨拶は代表がしていましたか。

<事務局> していました。今回は最優秀を獲得した岩永さんをお願いしていました。

<藤井委員> 観点として門真市にどう返していくのというのが盛り込まれていたと思いますが、そういう観点、代表の方がご挨拶されるとき周りでも聞いているからきっちりおさえていく必要があると思います。英語で挨拶するのもいいかもしれませんね。英語でもやっていましたか？

<事務局> いや、英語ではなかったですね。

<藤井委員> プレゼンテーションで最優秀になった人はちょっと英語でプレゼンもやってみようかな、みたいなもの考えてみてはいかがでしょうか。

<柴田委員長> 他にございませんでしょうか。他にないようでしたら、皆さんお忙しいのでこの辺で終わらせていただきたいと思います。よろしいでしょうか？

お忙しい中ご出席いただきましてありがとうございます。今後ともまたよろしく申し上げます。